http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.153　13/02/07

自立とは

６日の朝日新聞「耕論」に、日本経済をどのように見るのか、二人の学者の論考が掲載されていた。東大教授松井彰彦さんの論。

＊

●市場への依存、自立の条件

～障害と経済を研究する松井彰彦さん～

障害の当事者研究の第一人者である熊谷晋一郎さんの話を聞く機会があった。熊谷さんは、東京大学先端科学技術研究センターに所属する小児科医。生後すぐの高熱が原因で脳性まひとなり、現在でも車椅子の生活だ。

彼の母親は熊谷さんの教育に情熱を注ぎ込んだ。医師の指示のまま、健常者と同様の動きを要求され、うまくできないと叱られもした。ある時、熊谷さんはふと思った。「このままじゃ、ぼくは母が死んだら死ぬな」と。

親の反対を振り切って山口県から上京し、一人暮らしを始めたのが１８歳、大学生になったときだった。「自立した」と感じた。もちろん、様々な支援が必要な熊谷さんの生活は非障害者が思い浮かべる意味での「自立」とは異なるかもしれない。では、何が自立を感じさせたのだろうか。

■命綱頼る危うさ

「自立」は「依存」の対極である。熊谷さんは母親依存から脱却して、自分で自分の生活を組み立てるようになる。現在、熊谷さんの支援者はリストにあるだけで数十人に上る。必要に応じて、彼らに支援を要請するが、特別な一人に負担をかけることはない。太いが切れたら終わる一本の命綱に頼っていた生活から、ゆるいつながりで形成された支援市場の網の目に支えられる生活となったのだ。（中略）

■支えは緩く多く

市場の特質は、よかれあしかれ、そのしがらみのなさにある。もちろん、市場経済のもとでも、私たちは様々なものに依存している。スーパーやコンビニがなければ三度の飯も満足に食べられない。店にしても、お客が来なければ困ってしまうから客に依存している。しかし、特定の誰かと強い依存関係に陥ることはない。Ａ店でモノが買えなくてもＢ店に移れる。Ｃという客に嫌われてもＤという客がモノを買ってくれれば店は商売になる。数多くのゆるいつながりに支えられた生活、それが市場経済の本質である。

熊谷さんは言う。「依存先が十分に確保されて、特定の何か、誰かに依存している気がしない状態が自立だ」。たくさんのものに支えられている状態が自立なのだ。　（中略）

市場に依存しきってしまうこともまた、脆弱（ぜいじゃく）な基盤の上に立った自立と言わざるを得ないのかもしれない。私たちはそのことを十分認識したうえで、市場とのつき合い方を考えていかなくてはならないのではないだろうか。

さて、熊谷さんの話を聞いたのは、福島県立相馬高校でのことである。くしくも相馬は二宮尊徳の直弟子が住み、報徳の教えを広めたところとしても知られている。その尊徳の言葉とされるものにこういうものがある。「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寝言である」。